



「乾田直播」を行った面積は、平成24年時点で60a。毎年、少しずつ拡大している



現在、スタッフは役員4人、正社員8人、パート10人の計22名。前列左から4番目が代表取締役の大友清康さん

津波により、沿岸部では、3分の2を超える農家が農業を断念しました。(有)耕谷アグリサービスには、そうした農家からの委託が急増。平成24年には、経営面積が約100haに達する一方、人手不足に悩むようになりまし。

「委託されたものは、すべて受けたいと考えていましたが、とにかく人手が足りませんでした。それで少人数でも、大規模な農業経営ができるよう、農作業を効率化する技術の導入が必要だと実感したんです」

そこで、農林水産省が被災地の早期復興

米の「乾田直播」を導入して、生産コストを3割削減！

大友さんらは、震災直後から農業機械の入手に奔走。がれきの撤去や農地の除塩作業も行いました。また、農地の排水施設が被災し、この年の米作りを見合わせる事になった近隣の農家から依頼があったことをきっかけに、60haの農地に大豆を作付けし、事業を継続しました。

しかし、平成23年3月11日、東日本大震災による津波で、農地の9割が浸水。トラクター3台も流されました。

「津波が引いた後、田んぼに行ってみると、一面、がれきの山でした。愕然としましたが、とにかく早く行動を起こさなければ、と思いました」と、代表取締役の大友清康さんは、当時を振り返ります。

被災直後の農地の様子



水田はがれきの山に埋もれ、農機具はすべて流された。「耕谷ではなく、まるで“荒野”のようだった」と、前代表の佐藤さん

津波で農地の9割が浸水

宮城県の南東に位置する名取市。肥沃な土地と温暖な気候に恵まれ、米、野菜、果物、花きなど、さまざまな作物が栽培されてきました。

(有)耕谷アグリサービスは、平成15年、

東日本大震災からの復旧・復興に向けて

東日本大震災による津波により、名取市沿岸部では1,245haの水田が被災しました。米作りを断念した農家に代わって立ち上がった農業者集団は、田起こし後に直接種もみを播く「乾田直播」などの技術を導入し、少人数で100haもの農地を守る大規模経営を実現しています。

文／梶原芳恵 写真提供／(有)耕谷アグリサービス

宮城県名取市／
(有)耕谷アグリサービス

震災による津波で、被災した農家に代わり、100haの農地を守る農業者集団、ただいま奮闘中！

大規模経営を可能にする最新技術をフル活用

- 2 東日本大震災からの復旧・復興に向けて
宮城県名取市／(有)耕谷アグリサービス
- 4 特集1
一歩踏み出そう！
憧れの農業へ
- 12 チャレンジャーズ トップランナーの軌跡
広島県 農事組合法人ファーム・おだ
- 14 特集2
食文化研究家・清 純の
味わい ふれあい 出会い旅
第11回／兵庫県淡路市「ちよぼ汁」
- 18 アフ・ラボ
ウナギの大量生産の実現に向けて
完全養殖技術が一步前進！
- 20 MAFF TOPICS
○2015年ミラノ国際博覧会
開幕 2カ月前
日本館プレス発表会レポート
○4月15日から5月14日は
「みどりの月間」

23 読者の声

表紙：タンジウ農場 撮影：多田昌弘

広報誌『aff(あふ)』について
農林水産省や農山漁村は、食料の安定供給はもちろんのこと、国土や自然環境の保全、良好な景観の形成などの多面的機能の発揮を通じ、国民の皆さまの毎日の生活において重要な役割を担っております。また、農林水産行政は、生産などの現場に密着したものであると同時に、毎日の生活に深く関わっています。農林水産省では『aff』を通じ、農林水産省における先駆的な取り組みや農山漁村の魅力、食卓や消費の現状などを紹介しております。

ホームページのご案内

『aff』は、農林水産省のホームページでもご覧になれます。
<http://www.maff.go.jp/j/pr/aff/>



■編集・発行 農林水産省大臣官房総務課広報室
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
TEL.03-3502-8111 (代表) FAX.03-3502-8766
<http://www.maff.go.jp/>

■編集協力 一般社団法人家の光協会
〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11
TEL.03-3266-9045 FAX.03-3266-9046
<http://www.ienohikari.net>

メールマガジンのご案内

大臣メッセージや施策の紹介、イベント情報などをお届けする「農林水産省メールマガジン」を毎週金曜日に発行しております。ぜひご登録ください。無料です。
<http://www.maff.go.jp/j/pr/e-mag/>

フェイスブック・ツイッターのご案内

フェイスブック <https://www.facebook.com/maffjapan>
ツイッター https://twitter.com/MAFF_JAPAN

本誌に掲載した論文などで、意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りします。

を目的に立ち上げた「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」に参加することに。この事業は、農業者が研究機関や自治体と連携し、最新技術の実証研究を行うものです。

まず取り組んだのは、米の「乾田直播」です。これは、水を張っていない田に、直接種もみを播き、苗がある程度育ったところで水を入れる栽培法。育苗や代掻きの必要がないため、作業時間が大幅に減り、生産コストを2〜3割削減できます。農地に凹凸があると、生育にバラつきが出て収穫が下がるのが難点でしたが、耕谷アグリサービスでは、大型機械で農地を精密に平らにする新技術を導入。収量を、通常の栽培方法並みにすることに成功しました。

また、「ICT(情報通信技術)」を活用した栽培管理も実践。これは、作業内容をデータとして記録したり、降水量や日照時間などの気象情報を収集したりするシステムで、作業の効率化や、収穫適期の予測に役立っています。

このほか、アスパラガスの生育を早める「伏せ込み促成栽培」や、キャベツの周年栽培にもチャレンジ中です。

「この地域の復興と農業の未来のために、こうした技術開発に、いっそう力を入れていきたいですね」と、大友さんは力強く話してくれました。